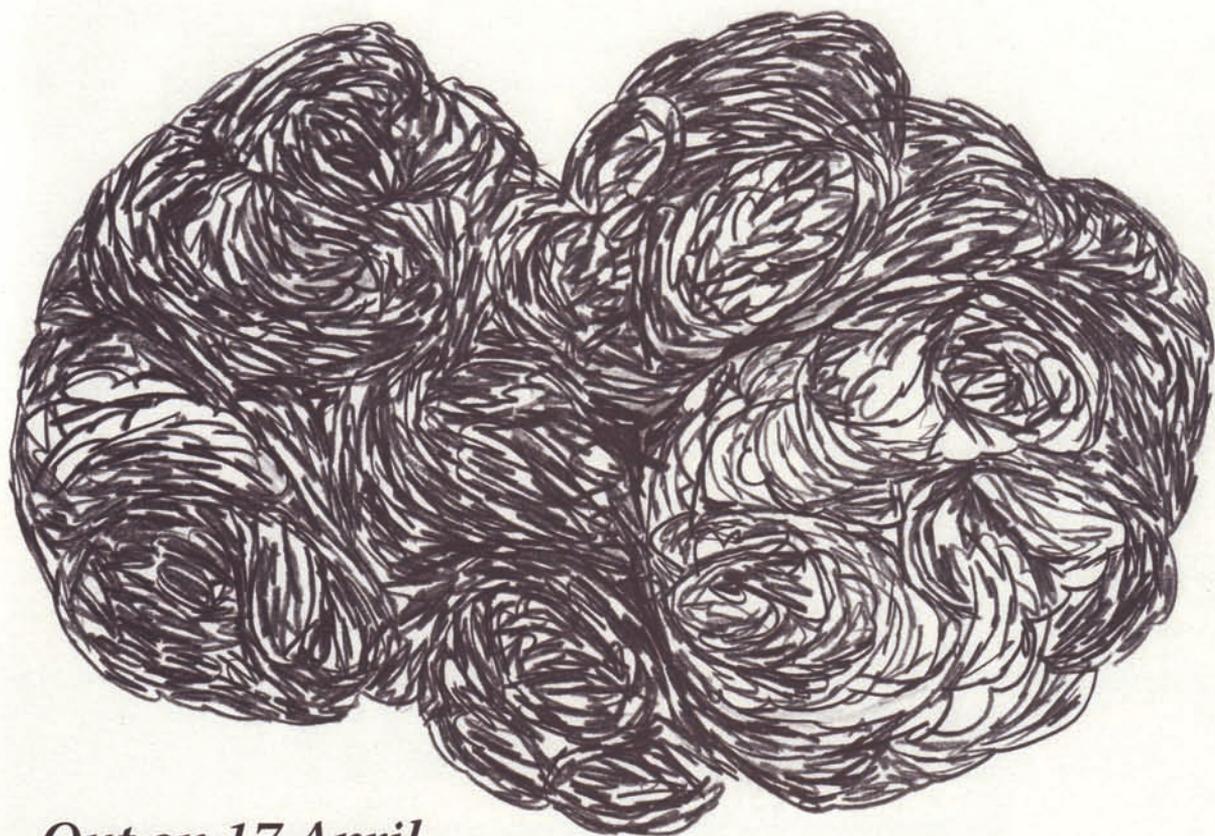


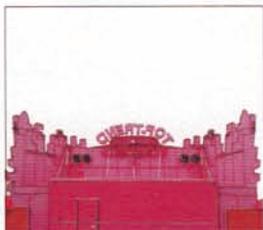
pre-mary

www.onpa.de

sub-tle.



Out on 17 April



The Audience Is Missing **JEAN-MICHEL**

onpa)))))®

MMOP-CD006

★ ALBUM OF THE MONTH of RAVELINE MAGAZINE No.174 SEP. 2007 (Germany)

★ CRJ CHART No. 3 at FM NORTHWAVE 14. FEB. - 21. FEB. 2008 (Japan)

SUB-TLE.

クラウス・ディンガーのプロジェクト、Japandorfに参加している、ドイツ在住のオカモトサトシとオノウチカズユキの二人から成る、サヴトレ。過剰な説明や情緒を排した彼らのサウンドは、クラウト・ロック〜エレクトロニカを通過した耳に、実に新鮮に響く。“音による映像喚起力の新領域”を開拓するその実像に迫るべく、メンバーのオカモトサトシに話を聞いた。

取材、文/小暮秀夫

■オカモトさんはクラウス・ディンガー・プロジェクトに参加するためにデュッセルドルフに移住されたそうですが、どういう経緯で参加することになったのですか？

オカモトサトシ（以下O）：2001年に渡独して私自身の音源を彼にプロモーションし、ゼーラントのスタジオに招致されたのがきっかけです。1999年からクラウス・ディンガー・プロジェクトに参加しているオノウチ（カズユキ）ともそこで出会いました。

■クラウス・ディンガーが過去にやっていたノイ！、ラ・デュッセルドルフといったバンドの音は昔から好きで聴いていたのですか？

O：そうですね。熱烈なファン、というわけではなかったのですが、なにかが心に引っかかっている感じでした。

■オカモトさんが活動の拠点を日本からドイツに移したのはどういう理由からですか？

O：以前日本でデジタル・ハードコアやギターポップのバンドで活動していたのですが、その後インプロヴィゼーション主体のさまざまなセッションに参加していく流れの中で、なにか受け手と作り手の関係とか、そういうものに個人的な行き詰まりを感じたのがきっかけです。

■移住先をデュッセルドルフに選んだのは、ドイツのアーティストとのつながりが以前からあったからですか？

O：ドイツ自体には以前から興味があり（音楽というより文学や歴史に興味があったのですが）、クラウスとも繋がりのある写真家の溝口真一氏を通じてデュッセルドルフという街に決めました。

■ドイツのどういうところに興味があったのでしょうか？ 文学や歴史に興味があったとのことですが、好きなドイツの作家などがいたら教えてください。

O：メジャーどころでゲーテ、トーマス・マン、リルケ、ハイネ、カフカ（正確にはドイツじゃないですが）。大学でドイツ文学科だったので。名前は覚えてませんが、わけ分からない抽象詩みたいなのも色々気になってました。あと戦前からの歴史というか、そこにいる、そこにいた人々の物事に対するリアクションや現実感に興味がありました。あとビールと。なに食ってるんだろう、なに食べてるんだろう、という。

■Japandorfプロジェクトは、どういったメンバーで構成されているのですか？

O：メンバーはサヴトレの2人、カズユキオノウチと僕、それにアーティストのミキユイ、ナカオマサキにクラウス・ディンガーです。

■今も活動は続いているのですか？

O：ええ、今も活動しています。まだ続行中です。ゼーラント（クラウスのスタジオがあります）やサヴトレのアトリエでのレコーディングが中心です。

■音はクラウスが今までやってきたことの延長線上にあるような感じなのでしょう？

O：音は現在のクラウス、現在の僕らです。勿論音楽が主体ではありませんが、ポップ・アートの軸をもって色々実験的なことを試みたりしています。Japandorfとしての作品の発表は、まだないです。

■ポップ・アートが軸にあるということは、やはり反復が表現の軸に？

O：そうですね。永遠に続きそうな反復みみれです。色んな局面、色んなスケールで。

■クラウスのプロジェクトに関わるのと並行してサヴトレを結成することになったのは、どういう経緯からですか？

O：アーティストの音源制作の依頼が色々あって、レコーディングの合間にオノウチと共に制作し始めたのがきっかけです。

■オノウチさんと一緒に始めるにあたって、コンセプトみたいなものはありましたか？

O：音楽そのもののコンセプト、音によって表現したいメッセージは特にありませんでした。そこに実体的なものを描きたい、実体がないのにそこに明確に形として見えている、わかりやすい・理解しやすいのに『そこにはない』っていう理不尽で矛盾しているパラドックスなものを耳に触れえるものとして存

在させてみたいというか。音そのものもそうですが、コンセプトやモチベーションもちょっと言葉に翻訳できないですね。音の裏にはなんにもないです。

■過剰な説明を排除した抽象的な音、もしくは、音の純粋な響きの面白さを追求していく、みたいなものがテーマとしてあったのかなと、音を聴いて思ったのですが。

O：そうですね。制作に関して言えば、楽曲としての音そのものの響きを構築していく感じでした。

■「14.5」「16」「36.1」など、曲名に数字をシンプルに使用したのが多いのにも、特に深いコンセプトはないという感じですか？

O：膨大なセッションが毎日のように繰り返されていたので、アーカイブは仮タイトルも無い番号の羅列になっていったんです。ただ、

これらをそのままタイトルとしたのは、言葉による色づけだったり、それが音以外で意味に集束・帰結しないようにしたかったのはあります。歌詞にも同じことがいえます。語感とか音感、それにまつわるもの…たとえば、理解ではなくて知覚する、なにかははっきりとはせず、ただそう感じた、というような。

■歌詞の内容に聴き手が自分を重ねる、みたいなロックの暑苦しい図式から離れたところにサヴトレの音はあると思います。やはりそういう、アーティストと聴き手の関係性みたいなものがキライだったのでしょうか？

O：作り手も聴き手も、それぞれがおのおので十全と屹立しているものだと思います。よりかなり、従属する類いの理解とか感じ方よりもむしろ、それぞれが干渉しあう、下手すれば誤解や崩壊も伴うようなコミュニケー

ションのリスクは、そこにあるべきものだと思います。

■サヴトレという名前はどういう理由でつけたのですか？“sub-tle.”という表記には何か意味が込められていますか？

O：まず、こちらの人が発音できないこと。結局言葉に翻訳できないものを音で表現しようとしているのに、明確な意味やテーマをそこに持たせたくなかったんです。ドイツ人、ベルギー人、フランス人、スペイン人、更にその中でも個々でみんな僕らのことを違う呼び方で呼びます。サチルとかサブティルとかサブタルとかサブタイトルとか。でもその全てが、同じものを指している。まるで、なにかみたくて。日本語表記を“サブトレ”ではなく“サヴトレ”としているのも、そんな感じです。こっちの人だけだと不公平なので（読

これは私です、とする全ての個に対する原始的な問いかけを繰り返す感じです

めないのは本当は本末転倒なんです。あと、正確な表記は“sub-tle.”とピリオドで「言い切って」いるんです。その辺の曖昧さというか、危うさ、逆説を込めて、それでも存在してる感じにしたかったんです。

■日々の膨大なセッションから生まれた音源の中からアルバムの曲を選ぶに際して、何かポイントはありましたか？

○：纏わりつく匂いが情けないくらい切実なもの、そこに温度というか感情のないもの、なにか名前をあたうことのできない物語のあるものを選んでます。こちらで展開していたライブは基本的にすべてゼロからのインプロヴィゼーションだったのですが、それら

をアトリエで再構築・プロセッシングしたのも何曲かあります。

■そうした選曲姿勢を集約したのが、「premary」というアルバム・タイトルなのではないですか？

○：これは、プライマリ【primary】のそのまた前（プリ）【pre-】、といった感じの造語なんです。語感・音感に漂う、なんだかやむにやまれぬ温度も感情も無い始まり、しかしだからってそんなに突き放してもない、みたいなものに辟易する要領です。あ、でもそれより更にもう少し、問題点のフォーカスを前にずらした感じです。問題点とか言いましたが、先述したとおり、音楽それ自体で「言

おうとしてること」、ありものの言葉で言えば「メッセージ性」的なものなんて何ひとつないんですが。

■“辟易する要領”ということについて、もう少し説明していただけますか？

○：自身に対する疑念というか、これは私です、とする全ての個の在り方に対する原始的な問いかけを繰り返す感じです。なんかわけ分かりませんね、すみません。

■哲学的ですね。

○：哲学ないんですけど。もうちょっとあってもいいんじゃないかと思ってます。でも何かによってしまうと、楽なんですよね。楽になると、100%じゃなくなる。怠ってしまいそうな気がするんです。全身でコミットする何かを探し続けていく事は、きっと生きていく上で不可欠・不可避なものだとは思いますが。

■サヴトレには美しいメロディが目立つものが何曲もありますよね。メロディについてどのような考えをお持ちですか？

○：最大公約数、というかだいたい根幹にある共通言語。原始人やバベルの塔の前でも恐らく機能した方法だと思います。メロディって、

■それぞれの担当楽器はどういうものですか？ ヴォーカルは2人が？

○：ヴォーカルは僕が担当しています。担当楽器は一概には言えないですが、オノウチがエレクトリック・ギターやドラム、ベース。僕が声とピアノとアコースティック・ギターやおもちゃ。ただ全般的に全ての楽器を取っ替え引っ返してお互いで重ねていく感じです。

■アルバムには他に誰かがゲストが参加していますか？

○：1曲目だけ、シャーマンのMara Ohmが参加しています。シベリアのオオカミの皮製、触ったら呪いのかかる太鼓をひたすらさすってます。他にもベルギー・ツアーで僕らが招致した二階堂和美が参加したセッションなどもあったのですが、今回のアルバムには収録されていません。

■二階堂和美さんとの交流はどのようにして始まったのですか？

○：バンドを辞めて東京でソロで活動していた時、詩人のマイアミさんの紹介で彼女と知り合いました。それから彼女の家でセッションしたり（その中の何曲かがアルバム「またおとしましたよ」に収録されています）、

© 安 / Kiyasu (TechnikLAB)



ツアーでピアノを弾いたりしていました。

■彼女のどこに魅力を感じますか？

○：魅力ですか。初めて会った時、cinqの竹村(理明)さんも交えて即興オペラを作ろう！と息巻いていたのですが、その時全員泥酔してしまって、酔っぱらった二階堂さんが「愛の讃歌」を歌い始めて。大人になってから、初めて人前で泣きました。酔ってたんですけど。なんだろう…。不確かさ、そしてそれに真撃であることでしょうか。こないだ帰国した時、広島のお寺にも遊びにいきました。

■不確かさに真撃であること、はサヴトレにも当てはまる姿勢ですよね。やはりそれは二階堂さんに影響された部分なのではないですか？

○：影響ではないです。誰もが持ち合わせてる駒じゃないでしょうか。往々にして自意識に阻まれがちですが。

■今後、誰かとコラボレートする予定はありますか？

○：これまでも音楽以外の領域でコラボする

ことが多かったのですが、これからもそうした方向は保ちたいと思っています。錯覚かもしれないですが、底に流れている普遍性みたいなものに近づくような気がするんですよね。他人、しかも畑の違う人々と一緒に何か作ると。ライブでは映像作家とのコラボが多いのですが、その際もなるべく彼らには寄らないようにしています。互いのマルチプリシティが100%でなくなってしまうので。皆がそれぞれで立って、そこから仕上がったカタチに参加しているという喜びは捨てがたいです。

■それって、すごい深いコミュニケーションのありかたですよね。

○：でもその辺り、追いこみすぎると離れていくんですけどね。難しいです。試み続けようと思っています。

■日本でライブをする予定はありますか？

○：日本では5月にライブをする予定です。併せてこちらでもヨーロッパ全域でツアーを始める予定です。 8S

21世紀に反復するクラウス・ディンガーのハンマー・ビート

ミニマリストに延々と反復される、頭打ちの人かハンマー・ビート。70年代初頭に派生したクラウト・ロックの中でも、そうした要素に魅せられた人間にとって、サヴトレが「クラウス・ディンガーのプロジェクト」に参加している日本人ユニットであるというのは、鼻血級の興奮させられる知らせだった。そして、実際に聴いたサヴトレの音楽も、クラウス・ディンガーのイメージをい意味で裏切る、素晴らしいものだった。

なにしろクラウス・ディンガーといえば、文の冒頭で書いた、独特な人かハンマー・ビートを“発明した”と言っても過言ではない偉大なアーティストなのだ。最初期のクラフトワークやノイ！、ラ・デュッセルドルフが「ドイツ流のポップ・アート解釈」をいち早く実践したバンドであることは、一連の秀逸なジャケットを見れば、誰もがお分かりいただけることであろう。そして、クラウス・ディンガーはそれらのバンドに関わることで、

ポップ・アートの本質である“反復”を“黒人音楽をルーツとする英米のロック的グルーヴ感にしばられない、直線的な単一ビート”という音で記号化していったのである。

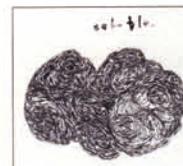
クラウス・ディンガーのそうしたポップ・アート性を体感するためにも、ノイ！のアルバム3枚（「NEU!」「NEU!2」「NEU!75」）と、ラ・デュッセルドルフの1stと2nd「ヴィヴァ」は当然必聴。中でも「NEU!2」は、シングル2曲の回転数を覚えて再生しただけの曲や、回転数を指でスクラッチしただけの曲でアルバムのB面を構成してしまうという、ブツ飛んだアイデア（ヒップホップのブレイクビーツ的手法の先を行くアイデア！）を実践した、最高に馬鹿馬鹿しい（勿論、これは最上級の褒め言葉だ）コンセプチュアル・アートの怪物。ラ・デュッセルドルフの「ヴィヴァ」は、ハンマー・ビートが約20分にわたって展開される「Cha Cha 2000」が収録された、人かトランスのこれまた大傑作である。（小暮秀夫）



ノイ！
「NEU! 2」
(P-Vine) 1973



La Düsseldorf
「Viva」
(Arcangelo) 1978



サヴトレ
「Pre-Mary」
(Onpa)

